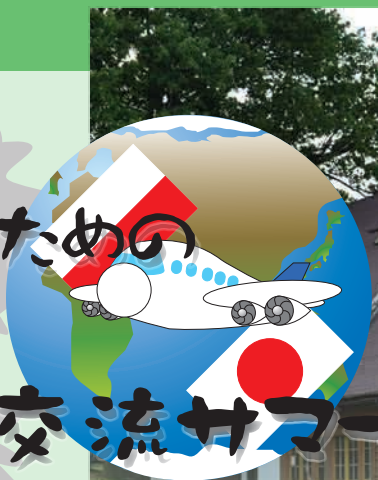


主体的な学びを实践する

小中学生のための



交流サマースクール



東 愛義



今回の目的地。ヤノビチエ・ビエルキエ村にある馬の牧場へ向かうため、車に乗り込んだ私たちが、これから村まで約三時間かかると言われた。ポーランドの時差にまだ慣れていないこと、そして長旅の疲れからか、子どもたちの目蓋はまるで石を載せているかのよう

に重く、頭はコクツコクツと揺れていてししおどしを連想させる。そんな子供たちを乗せて、車は高速に差し掛かった。車の窓に顔を向けると、日本では見慣れないイネ科の植物が辺り一面に広がっている。その美しい景色を漠然と眺めていると、その景色が異常に早く通り過ぎていく。それもそのはず、ポーランドの高速道路は最高時速が140kmらしい。日本ではありえないことだが、確かにドイツなどには時速制限のない道路もあるため、ヨーロッパからしてみればこのくらいは当たり前のことなのだろう。それから2時間経ったのだから、車はずでに高速を降り、一車線の山道を進んでいく。すると右手に馬の書いてある看板が目に入ってきた。目的地に到着したのだ。車から降りるとひんやりとした空気が身を震わせる。そんな中で日本の国旗を振りながら、牧場のホストであるEWA（エウア）さん家族が私たちを歓迎してくれた。そこはチャロジェイスカ・グラという名の馬の牧場で、海拔600mに位置する広大な土地に馬を放馬している。自然に近い状態を維持することによって、出来るだけストレスをかけずに馬が馬らしく生きていくの事。そんな環境づくり環境の中で、私たちは一か月間、馬と共に濃い時を

各々の心に刻んでいく。

到着した次の日（6月13日）を休息日として、6月14日から私たちは活動を開始した。この日は、牧場で働いているパウラさんと共に馬との接し方を学ぶことに。馬とふれあうときは心を穏やかにして、馬の後ろには立ってはいけないこと。そして、急な動きをしないようにすることなど、5つのルールを覚えてもらった。これは神経質な馬を出るだけ刺激しないようにするためのとても大切なルールだ。子どもたちも自分でそれを分かっているのだ、真剣に耳を傾けている。ある程度ルールの説明が終わった後でパウラさんは子どもたちに「馬が生きていくには何が重要か？」と質問を投げかけた。子どもたちは「食べ物！」「広い場所！」と自分の考えを口に出す。それに対してパウラさんは「確かに馬には広い場所や食べ物が必要ですが、他にも大切なものがあります。それはあなた方にとっても大切なものです。」と助言をしてくれた。それを聞いた一人が「家族」と言い、それに続いてもう一人が「友達！」と元気よく言った。そう、人間にも家族や友達が必要なら、馬にだってそれは必要なのだ。パウラさんに馬のことについて色々教えてもらった所で私たちは牧場へ行き、ブラッシングで馬との親交を深めた後、鞍をつけて散歩へ向かう。一人が馬の背中に跨り、それをもう一人が先導する。片道一時間半かけて向かった先は、牧場の近くに位置するポルトウフ城だ。そこは14世紀に建てられたお城で、自然の大岩がある所を巧みに利用していた。百年程前には人が住んでいたらしく、人の手が入らないと荒廃していくのは、日本と同じようだ。

6月16日、私たちはここ、ヤノビチエ・ビエルキエ村の子供たちと交流するために、村にある学校へ向かった。学校に着くと丁度散歩に行くところだったらしく、私たちも軽く自己紹介した後、一緒に近くの公園へ行くことに。初めは言葉が通じないため、どちらの子も恥ずかしがっていた様子だったが、一緒にフルーツバスケットや鬼ごっこなどをしているうちにいつの間にか仲良くなっているようだった。そう、これが子どもたちの力なのだろう。ただほんの少しきつかけがあるだけで、言語の壁を飛び越えることは容易いことなのだ。しかし、言うのは簡単だが、実際にはとても難しいことなのである。そのため子ども頃からこういつた状況に慣れておくという意味でも、この交流会はとても意義あるものなのだろう。そして、

最初は馬に対しておどおどしていた子どもも、帰るころには「また乗りたいね！」と最高の笑顔を見せてくれて、それだけで私にとってもとてもいい一日になった。



(右) 自分のブラッシングした馬と絆を深める
(左) 馬を引きながら、散歩へ向かう子どもたち



(上) 村の子供たちと共にフルーツバスケットで遊ぶ子どもたち。そこに言葉の壁は感じられない。
(左) 森一面に広がるブルーベリーを一生懸命摘んでいる村の子供。色素が強く、手と舌が紫色に染まっている。少し酸味があるものの美味である。

で、鬼ごっこなどが一段落付いた所で、次は近くの森へ散歩に行くことになった。森を歩いていくと、きれいな小川など綺麗な景色が続いている。少し行くと、前を歩いていた子どもたちが急に足を止めた。何事だろうと思いつ、子どもたちの目線の先を見てみると、なんと、野生のブルーベリーの畑が広がっている。うらやましいことに、これはポーランドでよく見られる光景だそう。みんな手と舌を紫にしながら必死にブルーベリーを摘んでいた。このように、こちらでは当たり前でも、日本ではあたりまえでないということ、数え切れないほどある。その違いを少し感じ取れるだけでも、日本を客観的に見る為の大きな力となっていくだろう。そうして、村の子供たちとの交流は終了した。

